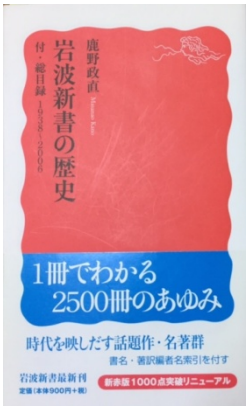
信州大教養部の頃

なんとか信大人文学部に入学でき、信州松本の地で生活を始めた。最初は「ウキウキ」した気分であったが、どうも大学になじめなかった。勇んで剣道部に入部したが、真っすぐ腕を伸ばせないなら「続けても？」という教育的「指導」を受け、早々と退部した。10 年ほど前にレポートしたが、これは今でも忘れられない「衝撃」であった。

こんなこともあり、大学にもあまり行かなくなり、下宿でひたすら本を読むようになった。今でいう「引きこもり」であろうか。でも当時は前向きに考えていたように思う。読書量が少ないことを自覚して、大学に入ったら本を読みまくろうと考えていた。平板で暗記中心の受験勉強に飽きていたこともある。自分なりに大学生としての「プライド」なるものを意識していたかもしれない。自分と比較して博学な「読書家」が下宿にいたことも、わが読書欲をかきたてた。

岩波書店の「岩波文庫 100 冊の本」を参考に、とにかく 1 日 1 冊といった「目標」をたて、朝から読書に励んだ。「岩波新書」も書店や古本屋で手に入れ、幅広く読んだ。仕送りしてもらっていたが、その多くを本代につぎ込んだ。アルバイトも最初はやらなかったので、当然のこと「金欠」になる。削ったのは食費だ。外食は金がかかるので、下宿でご飯を炊いて、ひたすら納豆と卵、味噌汁を食べ続けた。それでも、今も納豆は食べ続けている。毎朝つくる「納豆オムレツ」だ。

大学時代の写真はほとんど残っていない。今のように写真を撮る趣味もなかったが、教養部の頃は「引きこもり」も影響していたと思う。写真は名大図書館の新書・文庫コーナーである。じつに多くの新書や文庫が並んでいるが、大学時代から通算して、どれだけ手にして読んできたか。



下の写真は、鹿野政直『岩波新書の歴史』2006 年である。付録に「総目録 1938~2006」が載っている。これを見ると大学時代に読んだ岩波新書をかすかに思い起こす。

今も記憶に残る読んだ本は、哲学から歴史、文学と幅広かった。トルストイやドストエフスキー、島崎藤村などの小説は、夜を徹して読み続けた。こうして手当たり次第に読み進むうちに、だんだんと社会問題とその背景にある政治経済の仕組みに関心が向かった。マルクスやエンゲルス、そしてレーニンなどの本も読み、資本主義社会の仕組みにも味を持つようになった。

信大教養部の頃は 1967 年であり、世の中はベトナム戦争や沖縄問題などで揺れ動いていた。そうした政治の動きにも目が向き始め、下宿「引きこもり」生活から飛び出すことになる。

（2016年9月4日）